ミステリアスな坂内隕石

坂内隕石とは

坂内隕石は、1913 年に岐阜県揖斐郡坂内村（現在は揖斐川町）で発見された重さ 4.18kg の鉄隕石である。大正 2 年 4 月 23 日に、村の若者 4 人が坂内村と徳山村の村境であるホハレ峠近くで萱を刈っていたときに、突然ヘビが現れ、追い払おうと拾い上げた石がずっしりと重く、通常の石ではないとして家に持ち帰ったという。その後、近くで働く鉱山技師が隕石であるとし、滋賀県木之本町の土倉鉱山技師の仲介で京都大学に持ち込まれ、鉄隕石と鑑定された。この隕石は、大正 5 年に京都で開催された博覧会に出展された。現在、京都大学には、この隕石のレプリカと説明書が残されているが、実物は行方不明となっている。

坂内隕石は、1935 年に京都大学花山天文台の初代台長であった山本一清氏が発表した日本の隕石リストを示した論文で紹介されて世界的に知られるようになった(Yamamoto, I., Kwasan Obs. Bull., No.306, 1935)。2000 年にケンブリッジ大学から出版された Catalog of Meteorite, Fifth Edition には、京都大学に保管されているが、現在行方不明となっていること、国立科学博物館の村山定男氏が 1962 年に書いた手紙をもとに、ヘキサヘドライトであると記されている。

図１．坂内隕石のレプリカ（京都大学所蔵）。

昭和 53 年の調査

村山定男氏は、1960 年に発表した「日本の隕石と国立科学博物館の標本」（自然科学と博物館、第 27 巻、3-4 号）の論文のなかで、坂内隕石について「この隕鉄は坂内村の山中で神谷力松という人が偶然発見したというもので、重さは四・一八 kg ほどであったが、京大鉱山学教室で鑑定の結果六面体隕鉄であったという。現在模型及び文書が保存されているが、残念なことに実物の行方がわからない。」と記述している。

村山定男氏は、国内で発見された隕石について、発見地や発見時の状況を調査して歩いていて、昭和 53 年に坂内村で調査を行っている。この調査については、昭和 53 年 11 月 23 日の中日新聞に記事が掲載された。その後、この調査の同行者が、坂内村史-通史編に、この調査でもたらされた知見を含めて、坂内隕石にまつわるさまざまなエピソードをまとめている。

坂内村史によると、この調査を行う前年、発見に関わった人物からの聞き取り調査が行われた。そのきっかけは、昭和 52 年 8 月下旬に、朝日新聞社から坂内村役場へ坂内隕石について照会があったことだという。これを受けて中井時男という人が調べたところ、拾得者が神谷力彌さんであること、いっしょに茅刈りをしていたのは 4 名で、そのなかに在村者の杉坂益也さんがいることがわかった。また、神谷力彌さんの話を録音しているテープがあることがわかり、その再生から、見つけたのは、春茅刈りをしているときだったこと、大きさのわりに重いので、珍しいと思い家の軒下に置いていたこと、鉱山技師のマルヤトーキチという人が流れ星隕石らしいから調べてもらうといって土倉鉱山事務所へ持っていったことがわかった。

村山定男氏は、昭和 53 年 11 月 19 日に坂内村に入り、杉坂益也さんに会い、京都大学のレプリカをもとに作った模型を見せて、神谷力彌さんがみつけた隕鉄であることを確認した。杉坂さんは模型をみるなり、「これや。これがあったんか。今まで誰がもっとたんや。」と言って、驚きと感慨の表情をみせたという。その後、いっしょにホハレ峠の発見地に赴いて現場を確認したのだった。

坂内隕石の行方

現在、京都大学には、坂内隕石の模型と当時書かれた説明書が残っている。発見時の状況、および京都大学に持ち込まれるまでの経緯が示されたあと、最後に、「参考資料として同大学へ寄贈を申込まれたり」という文章で終わっている。末尾の署名には神谷力彌、間五郎という二名の署名がある。

現在、坂内隕石はどこにあるのであろうか。発見者の神谷力彌氏のインタビューによれば、京都大学に持ち込まれてからもどってきていないことがわかる。坂内隕石は、仲介者のマルヤトーキチ、間五郎のどちらかの手元から失われたものなのか、京都大学で保管中に行方不明になったのか、いまもって謎に包まれている。